

常照

第819号

お坊さんが嫌い？

仏教が必要だと思う。あるいは興味がある・・・九十%。お寺が必要だと思う。あるいは興味がある・・・二十五%。僧侶に好感がもてる・・・十%。もう十年も昔の事にはなりません。【問われる宗教、岐路に立つお寺】こんなタイトルで雑誌だかテレビで特集が組まれていました。その中での世論調査の結果です。まあ少し気付いていた事ですが、信憑性はさて

おき数字を目の当たりにすると辛
いものです。さらに、お坊さんが
嫌い・苦手だというその理由は？
という問いには「傲慢な態度や威
圧的な態度」「何かと寄付を求め
てくる」「難しい話ばかり、ある
いは同じ話ばかり」とのご指摘。
ハイ、そうです。確かにそういう
部分があります。自分は違います
よ、ウチのお寺は違えますよと
言っても、一度不信感を持たれた
ら簡単に信頼は取り戻せません。
あの特集から十年経過しました
が、状況は変化したのでしょうか。
建物としての寺社仏閣や、教え
としての仏教は変わらず一定の支
持を得ている気がします。といえ
どもコロナが原因か「毎月のお参
りはお休みして欲しい」との声は

増える一方です。それはコロナが収束しても簡単には元に戻らない気がします。一概には言えませんが、お坊さんに好意的な方、お坊さんが必要としている方はどんどん減少しているような気がします。お寺を基盤として仏教を普及、広めていくことを生業としている我々僧侶が、お寺と仏教の足を引っ張っているという風に受け止めれば大いに反省すべき問題であります。

鎌倉時代だって

しかし、どうもお坊さんは好かんという人は昔からいました。親鸞聖人であっても、民衆から諸手をあげて歓迎された人生を歩んだわけではないのです。これは親鸞

聖人四十歳すぎ、常陸（茨城）の稲田に居を構えた頃のお話です。雪の降る中、夕暮れ時に吹雪の中で道に迷われた親鸞聖人ご一行は、ようやく見つけた民家に一夜の宿を請われました。家の主は日野左衛門頼秋（ひのざえもんよりあき）という男。流罪によりこの地に流れ着いた、金貸しを生業とする、武士とも獵師ともいわれた男。信じられるものはお金だけだというような人間不信の者でありました。そんな男に一夜の宿を請うと、「仏道を修行する者は雪や寒さくらい大丈夫だろ。暖をとろうなんて厚かましい」と断ったので、わかりましたと親鸞聖人ご一行は門前の石を枕に雪の中で休まれたそうです。吹雪の中で野

宿ですよ。私なら腹を立てて、一刻も早くその場を立ち去ります。そして一生恨みます。しかしなぜ、自分を無下に扱った人の家の軒先で休もうと思われたのでしょうか？この寒空の下、お体を心配した仲間に対して親鸞聖人が詠まれたのが「寒くともたもとに入れよ西の風 弥陀の国より吹くと思えば」という歌でした。

その歌の心

【阿弥陀如来から頂いたばかり知れないご恩を思えば、冷たい風も取るに足らないものである】とこういう歌です。自身の歩む人生がどんな過酷な環境、孤独な状態に立たされていようが、阿弥陀如

来はいつでも何処でも常に私に寄り添い、見捨てることなくはたつき続けてくださっていると教えて下さったのです。そしてこれは憶測ですが、日野左衛門頼秋という男に接して、何とか彼に仏法を伝えなければと思われたのではないかなと思うのです。私達は自分に優しくしてくれる人を大事にします。しかし一方で阿弥陀さまが：と話しかけても相手にされない場合だってあります。でもそれは過去の自分の姿なのです。聞く耳をもたなかったそんな私を見捨てなかつた誰かがいたから今があるのです。だからこそ親鸞聖人は、日野左衛門という男に阿弥陀様のお慈悲を伝えるべきだと思われたのではないでしようか？

一)の話を顛末

一方、吹雪の中へ親鸞聖人一行を追い出した日野左衛門が眠りにつくど夢の中に光に包まれた観音が休んでおられる。直ちにお迎えして教えを受けよ。さもなくば、未来永劫、苦海に沈むぞ」というお告げを受け慌てて外に飛び出し、非礼を詫び、迎え入れ教えを乞うたそうです。そしてその夜のうちに親鸞聖人のお弟子となり、法名を入西房道円と名付けていただきました。その後道円は邸宅を寺として石を枕に念仏する親鸞の姿を重ねそこを枕石寺と名付けました。現在もそのお寺は真宗大谷派の寺院として現存しています。

四月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 四月七日(木)～十一日(月)

休 座

○後期 四月十三日(水)～十六日(土)

長崎教区 佐世保組 明照寺

講師 末 永宗 平師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～

午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。

どうぞお誘い合わせ頂き、ご聴聞に来院ください。席の間隔を保ち、換気実施の上、お待ちしております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 (011-34) 221074 四番
 FAX (011-34) 219140 八番
 テレホン法話 227116 一六番